



お役所のお国柄

すずき ようこ
鈴木 庸子

ナポリオリエンターレ大学・政治学部講師

「財布を盗まれたので、盗難届の作成をお願いします」

「身分証明書をお持ちですか」

「いいえ、残念ながら財布に入れていたので・・・あの、幸いコピーが」

「お国はどちらですか？」

「イタリアです」

「じゃあ、イタリア大使館に行って、あなたがイタリア人の何某だという一筆をもらってきてください」

「実はイタリア大使館とさっき電話で話したんですが、まずこちらの盗難届受理証明書を持って来てくれと・・・」

「とにかく、イタリア大使館の一筆がないと盗難届は作成できませんので。大使館の住所はこちらですから」

「・・・これ、イタリア大使館から電話でもらった住所と違うようです」

「え？でもこれがイタリア大使館の登録住所ですから」

降りやまない雨。底冷えのする、十一月のロンドン。押し問答を続けること一時間、時計は夜十時を回った。ガラスの向こうで忙しく動き回っている警察官の対応は、録音されたものの如く正確に繰り返されるばかり。疲れと怒りが入り混じった顔で窓口を離れた友人は、コートを羽織ると低く吐き出した。

「朝一で、イタリア大使館に行くわ。イタリア大使館がくれた住所の」

翌朝。イタリアとヨーロッパの旗が掲げられた、優雅な集合住宅のうちの一軒のチャイムを押す。

金髪の男性が顔を出した。

恐る恐るイタリア語で「あの、こちらイタリア大使館でしょうか？」

「正確には総領事館です」と、ネイティブなイタリア語での答え。

「盗難に関して昨日電話した者です。警察に行って、教えていただいたとおり盗難届をお願いしようとしたんですが、『まずはイタリア大使館による保証が必要』の一点張りで、全然耳を貸してもらえなくて・・・」

「我々大使館がこう言った、って説明なさいました？」

「ええ、IDカードのコピーも持っていたんですが、見てももらえませんでした」

「・・・マニュアルはそうでしょうけど、あなた方が嘘を言ってるかどうかなんて、子どもだって分かったでしょう。寒かったですよ、ともかく入って入って！！」

総領事館の人によると、この友人が警察で食らった門前払いは「ヨーロッパ人としてのIDカードが欲しいばかりに、これの盗難・遺失被害者を装う『自称ヨーロッパ人』の続出」に手を焼いたスコットランドヤードが、「特にイタリア・スペイン人になり済まず南米人の例が顕著なため、彼らに特定した対策として、盗難・遺失届の処理方法を最近変えた」とぼっちり、だそうだ。実際、「自称イタリア人」がこの総領事館に身分証明を頼みに来ることもさほど稀ではないと言う。「イタリア人かどうかなんて、会えば我々にはすぐわかることなんです。逆に通報されちゃうのに」

また、前日にロンドン警視庁がくれた住所は確



かにイタリア大使館のそれだが、外交関係者にのみ開かれていて、一般人は出入りできないとのこと。「今日は土曜だから、いくらチャイムを押しても、応答はなかったはず。まじめなイギリス人よりもお気楽イタリア人を信じて、今回は当たりでしたね」

イタリア人のお墨付きを総領事館からもらった友人は、最寄りの警察署に向かった。彼女が戻るまでの一時間半、私が待機していた同館の待合室は、ロンドンにおける盗難例報告会の様相を呈していた。

「パパが去年、ホテルから空港までの移動の間に財布を盗られたんだけど、気がついたのは空港のチェックインカウンター。精いっぱい平静を装う彼を残して、我々家族はとにかく帰国（EU加盟国のうち、IDカードを有する国の国民は、EU圏ならパスポートに代わるものとしてこれを使用できる。イタリアの場合、プラスチック製〔クレジットカード大〕と、紙製〔二つ折り〕でこれより一回り大きいものの二種がある。普段も使用頻度が高いため、財布に入れておくのが一般的。そのため、外国で財布を盗まれると、この被害者のように出国手続きが取れない結果となる）。パパは一人向かった警察で、いくら旅行者で知人が誰もいないことを説明しても『あなたが、本当にあなたが言う何某だということを証明できる人を三人連れてこなければ盗難届は作成できない』と突っぱねられ、『じゃあ今から地下鉄に飛び込んでやる』って脅したの。それで漸く証明書を出してもらったわ」

「バッキンガム宮殿で、衛兵の交代の時にやら

れたようです。全員が一点を見つめている瞬間ですもの、やりたい放題ですよ。妻とクレジットカードを分けて所持していたのが不幸中の幸いで、旅の空で無一文にはならず済みましたけど」

「パブで、ジャケットのボタンがかかった内ポケットに入れておいた革のカードケースの中から、魔法みたいにクレジットカードだけ抜かれて。僕のジャケット、座ってた椅子の背もたれにかけてたんですよ！触られた痕跡が全然なかったお陰で、気がついたのは翌日。青くなりましたよ。犯人は恐らく、パブから追っ払われた、スペイン語を話してた二人組」

「ラッシュアワーの地下鉄で、金髪の気の弱そうなお兄ちゃんにすられました。見た瞬間『細いのに、いやにでかいコートを着てるなあ』って思ったんだよなあ。いかにもサラリーマンっぽいのに、工場で履くようなごっつい、しかも使い古しの靴を履いてたり、とにかくちぐはぐでおかしいとは思ったんだけど・・・今となれば、かばんを持っていたのは義手で、本物の手はコートの中だったんだってことまで見当がつくんですが、奴を前にしていた時は判断が鈍りました。あまりに『まさか』っていうタイプで・・・」

ナポリ空港のパスポートコントロールで、IDもパスポートも持っていない友人は止められた。「ロンドンで盗難に遭いまして。これがロンドン警視庁の盗難届受理証明書で、それから・・・」
「ナポリで生まれ育ったくせに、ロンドンでやられたあ？ははは、早くうちに帰った帰った、ナポリ人としてよく反省しなさいよ！」